

菊池一隆著

## 『東アジア歴史教科書問題の構図——日本・中国・

台湾・韓国、および在日朝鮮人学校——』

法律文化社 二〇一三・六刊

A5 三八八頁 六〇〇〇円

本書は、昨今の歴史教科書問題を巡る諸問題に、歴史学の立場からアプローチするものであり、日本と中国・台湾・韓国、および在日朝鮮人学校で使用されている高校の歴史教科書を、論争の核心である日中戦争時期を重点に比較している。比較する各教科書の本文を引用し、その後筆者のコメントを付す形式を取っている。

「第一章 歴史教科書を巡る歴史と共通教科書」は、清末から現在までの中国の教科書論争を概観した上で、日本側の検定制とその問題を指摘し、検定制の是非を問うた家永教科書裁判にも言及する。また歴史認識がいかなるものかを踏まえ、歴史共同研究の必要性と、共同研究における日中・日韓の間の主張を比較し、欧州で先駆的に行われた共同研究の事例も取り上げる。

「第二章 日本・中国・台湾の高校歴史教科書の比較検討」は各国の記述の特徴を比較する。日本側の記述は東京裁判について充実するも侵略実態、植民地・占領の統治実態などの諸点が弱い。反対に中国側は実態に関して圧倒的な力量を注ぎ込んでいる。他方、台湾側では絶対量は少ないものの、これら諸問題を厳密に検

討し、韓国側でも「従軍慰安婦」などの日本側が避けている内容に圧倒的な力量を注いでいるとする。

「第三章 歴史教科書の中の台湾」は、日本・中国・台湾の各教科書における台湾に関する記述を比較し、日本側を静態的、中国側を対日抵抗に重点を置いて示した上で、ともに台湾を連続性がなく受動的な存在として論じており、歴史叙述に空白が多いことを指摘する。さらに台湾の教科書制度を紹介し、従来と現在の記述内容の変化を示した上で、近年における台湾史からの視点を評価する。

「第四章 歴史教科書の中の韓国・朝鮮」では、両大戦間期について日本側の記述は簡潔で分量が少なく、検定制や国内外の反応に対して「逃げの姿勢」が見られると分析する。他方、階級闘争から分析する中国側が取り上げない「文化政治」について台湾側が重点を置いていることも指摘する。また韓国側が自国民族に焦点を合わせ過ぎている点や、在日朝鮮人学校側の過剰な賛美や誇張を除けば、両者とも具体的に歴史的事実を記述していると評価する。

「第五章 「氷点事件」と上海版の歴史教科書問題」は、中国の教科書制度との関連において、中国当局とは異なる意見を持つ袁偉時論文や上海版歴史教科書を検討し、特に前者はその限界よりも意義が大きいと評価する。

「第六章 『新しい歴史教科書』（扶桑社）と戦時期日本の歴史教科書」は、扶桑社版の問題点を列挙した上で戦時歴史教科書との比較を行い、強い疑問を投げかける。さらに戦後歴史教育の推

移を述べ、『指導要領』が「二国史」的発想に陥りやすい限界を指摘し、その延長線上に扶桑社版を位置づける。

「総括と展望」では、本書の内容を総括する。そして、一方の側に欠落している歴史的事実を他方の教科書から補足し、歴史的事実に対する各国の分析や認識を組み合わせることなど、東アジアの共通教科書作成に対するいくつかの提起を行っている。

欧米を過度に意識し、アジアの視点が不足していることや、検定制度によって起こる恣意的記述の可能性などといった日本の歴史教科書を取り巻く問題を歴史学の立場から明らかにしたことが本書の特色である。

(藤原裕士)